特集 スペシャル座談会

学長×学生

専大の学びの力

専修大学学長
佐々木重人教授
東京都出身。74年に専修大学商学部に入学し、以来専大で学び、研究に従事してきた。専門は会計史。大学におけるこの1年の変化は、20年分にも相当すると語る。

ネットワーク情報学部
ネットワーク情報学科4年
田辺湖花さん
神奈川県在住。杉田プロジェクトに所属し、イベント「いろ色！～自然探検隊～」に取り組んだ。趣味は映像制作、モノづくり、漫画鑑賞など。

大学で何をマナブか

学生は大学で何を学んでいるのか。まずは、学生たちに大学で力を入れて取り組んでいることを語っていただきました。専修大学での学びについて、学生と学長による意見交換のスタートです。

田辺：私はネットワーク情報学部の杉田プロジェクト※の研究に力を入れてきました。昨年度、杉田プロジェクトでは自然体験コンテンツの制作に取り組みました。簡単に言うと、親子をターゲットにした、生田緑地の自然と触れ合う目的のものです。自然界にある色を探してマップに貼ったり、スマホで写真をアプリと連動させたりするもので、この取り組みは学内のコンテスト〝SDGsチャレンジプログラム2020〟において、学長賞を受賞しました。

プロジェクトは学生同士で協力しながら進めますが、昨年はオンライン授業が中心だったため、意見を交換するのも難しい面がありました。でも、最終的には生田緑地でイベントを開催し、開発したアプリを実装できました。イベントに参加いただいた親子からも「楽しかった」「またやりたい」という言葉をいただき、とても嬉しかったです。

学長：田辺さんの取り組みは、学長賞をお渡ししたのでよく覚えています。SDGsチャレンジプログラム2020は、地球全体の課題でもあるSDGsの17の目標に向けた取り組みを評価するものです。このコンテストを通して、専修大学の教育目標である〝社会知性の開発〟を学生と共有できたのは、大きな成果だと思っています。

田辺さんにとっては、作業のひとつひとつが困難の連続だったと思いますが、それが正に専修大学の〝社会知性の開発〟です。課題を解決したこの経験が、社会に出てからの自信につながってくれれば嬉しいです。

※ネットワーク情報学部のプロジェクトとは、他学部の「ゼミナール」に相当するもの。

新型コロナ感染拡大により学生が大学に通うことすらままならなくなった昨年来、大学は激動の変化の中にあります。学生たちはどのような大学生活を送っているのでしょう。そして、専修大学は、どのように教育に取り組んできたのでしょう。佐々木重人専修大学学長と、学生が専修大学での学びについて話し合いました。

経営学部
ビジネスデザイン学科2年
林綾奈子（はやしりなこ）さん
東京都在住。1年次に専修リーダーシップ開発プログラムに参加。趣味は映像鑑賞、カフェでの勉強など。焼肉屋とカフェでアルバイトをしている。

経済学部
現代経済学科2年
鳥居大暉（とりいひろき）さん
神奈川県在住。会計士上級講座（奨励生）を受講しながら、公認会計士を目指す。趣味は友人とスポーツをすること（陸上など）。

林：私は入学当初から〝専修リーダーシップ開発プログラム〟に力を入れてきました。このプログラムは、企業人などの講師から学ぶ「理論」、チームで企業の提示する課題に取り組む「実践」、自分自身を振り返る「内省」、3つのサイクルを回してリーダーシップを身に付けるというものです。私のチームは「実践」として、障がい者向け就職情報サイトの新規登録・利用の促進に取り組みました。学年、学科、性格も違う人が協働することは本当に難しかったです。人の意見を聞きながら、自分の意見を通すことに、ストレスもありました。でも、やり終えれば楽しかったと思えます。

このプログラムを通して、人との関わり方、プレゼン資料の作成、企業の方とのメールのやり取りなど、社会常識を広く学べたと思っています。今年はチューターとして、プログラム参加者のサポートに当たっています。

学長：「リーダーシップ」という言葉は、みんなを引っ張っていくようなイメージが強いけれども、林さんが学んでこられたのは、自分自身をどうコントロールするかということでもありますね。プランを立てて実行し、問題があればチェックして改善していくPDCAのサイクルを自分の課題として回していったのですね。

「リーダーシップ開発プログラム」のある大学は、まだそう多くはありません。専修大学では単位化もしており、大学をアピールする特徴的なプログラムだと思っています。

現在2年生の林さんは、コロナ禍のため入学後も大学に通学できない状態でした。大学としては、本当に申し訳ないという思いと、なんとか我慢してほしいという思いがありました。現在は対面授業も行っていますので、昨年の分を少しでも挽回してほしいと思っています。

林：1年次は、ほとんど大学に来なかったので、同じ学科の友達ができませんでした。でも唯一、専修リーダーシップ開発プログラムで学生同士のつなが

←↓田辺さんが取り組んだ杉田プロジェクトでは、自然と触れ合うコンテンツを開発し、生田緑地でイベントを開催

両親と仕事の話をして理解できるのが楽しい。
勉強が実生活に活きていると感じられる。
鳥居さん

大学では自主性が求められますが、
オンラインになって、
その傾向はより顕著になっている。
林さん

りを持てたのはよかったです。前期はオンラインで、夜な夜なミーティングすることもありました。後期になって、初めて仲間と直接会ったときは、嬉しかったですね。

いま佐々木学長から、専大のアピールになるというお話もありましたが、実際に専修リーダーシップ開発プログラムがあるから、専修大学に入学したという学生もいました。

鳥居：私は大学では、公認会計士試験に向けた勉強に力を注いでいます。エクステンションセンターの会計士講座を受講しながら勉強していて、今は奨励生として受講料のほとんどを大学に負担いただいていますので、責任をもって合格を果たしたいと思っています。

講座は1年次から始まり、まずは日商簿記検定2級合格を目標に勉強しました。実際に勉強をしてみて、会計の勉強は楽しかったですし、これを職業にしてもっと深めていきたいと思いました。今年の2月からは会計士上級講座が始まりましたので、長いスパンで、自分を律して時間を確保しながら勉強を進めています。

公認会計士試験の勉強をしていると、社会に関する知識がすごく入ってくるので、ニュースの内容がわかったり、両親と仕事の話をしても理解できるのが楽しいです。勉強が実生活に活きていると感じられます。

私もコロナの影響は少なからずありました。本来の講座ならみんなで教室に集まって受けるのでしょうが、オンラインの配信講義を見て問題集を解くという形式に変わりました。最初の数カ月は、高校時代の友達たちが遊んでいる様子を知ると、怠けたくなる気持ちを我慢するのに苦労しました。

学長：専修大学は公認会計士試験で継続的に現役（在学生）の合格者を出していて、その情報は高校生にも浸透しています。資格試験で一定の存在感を示すのは、高校生に対してもわかりやすいアピールになります。ここ最近では、公認会計士試験の合格者数が全国の大学でベスト10に入る年もありました。さらには国税専門官採用試験においても昨年度は107名が合格しました。採用者数（2020年4月就職）でみると、全国の大学で4位、関東では2位となります。

コロナと大学生活

新型コロナウイルス感染拡大による社会の大きな変化の中、大学はどのように感染防止に取り組みながら教育を担保したのでしょう。まずは佐々木学長に昨年からのコロナへの対応を振り返っていただきました。

学長：昨年3月、社会全体が実態のわからない新型コロナウイルスへの恐怖感に支配され、大学では卒業式も入学式も中止になりました。それでも授業はできるだろうと、4月の初めの時点で私は思っていました。ところが政府が緊急事態宣言を発出し、キャンパスに学生を入れるなんてとんでもないということになり、専修大学も他大学と同様に全面オンライン授業にシフトせざるを得ませんでした。

オンライン授業は、学生も初めてならば、先生方にとっても初めてのことです。前期授業を開始した5月11日までに、大車輪で準備を整えました。これは精一杯やって最短の時間だったと思います。当

⬆➡林さんが参加した専修リーダーシップ開発プログラムでは、チームでのミーティングやプレゼンの機会を多く設けている

学生時代に何か一つでもやり切る経験があると、社会に出たとき大きな自信になる。
佐々木学長

時、国全体のネット環境はぜい弱で、一斉にインターネットを利用すると回線がパンクしてしまうため、国立情報学研究所の指示で、小学校低学年と特別支援学校がインターネット回線を使えるように、大学はデータダイエットして、最低限のデータのやり取りで授業をするように求められました。そのため、静止画に音声をつけたような形態のものもあり、入学した１年生はこれが大学の授業なのかと残念に思った部分があったに違いありません。申し訳なかったという言葉しかありません。

昨年６月には学生にオンライン授業に関するアンケート調査を実施し、後期からのオンライン授業の改善につなげました。調査は今年度も実施します。今後は、対面とオンラインを組み合わせて、たとえば海外との交流や、地方の起業家の話を聞くなど、学生の意見を取り入れながら新しいオンライン授業を設計しようと考えています。

また学生同士の友人関係が成立するような機会は必要というのが教員の一致した意見ですから、今年度は対面での授業も確保して、４月のオリエンテーションガイダンスの期間を通常の２倍にし、サークル活動の勧誘期間を設けたりもしています。

鳥居：私は、オンライン授業が必ずしも悪いことばかりではないと思っています。オンライン授業では、わからないところを積極的に自分で調べるようになっていて、対面授業よりも習熟度が高まるかもしれないと感じています。通学時間が必要ないのもメリットです。佐々木学長にお伺いしますが、オンライン授業になって、学生の成績に変化はありましたか？

学長：全体的に成績はよくなりました。これは２つの面があるように思っていて、鳥居さんがおっしゃったようにオンライン授業で積極的に調べようとするモチベーションが高まった可能性もあります。一方で、オンライン授業で困難な中、頑張ってレポートを提出してくれた学生を、先生方が好意的に評価したのかもしれません。いずれにせよ、オンラインでも授業に必死についてきてくれた学生が多かったのは事実です。

林：結局はオンラインでも対面でも、やるもやらないも自分次第だと思っています。大学では自主性が求められますが、オンラインになって、その傾向はより顕著になっているのではないでしょうか。自分が何をすべきか考える時間も増えました。やる気のある人は成績も伸びているんじゃないかと思います。

今年度はオンラインと対面どちらもあります。例えば、１限目はオンライン授業で２限目は対面授業の日は、大学でオンライン授業を受けることもあります。その点、オンライン授業だけの方が生活のリズムは作りやすかった…。でも、やっぱり対面授業は友達ができるからいいと思います。

専大の伝統とミライ

かつての学生時代のこと、これからの専修大学のビジョンなど、学生からの質問に、佐々木学長が真摯に答えてくれました。その話からは、専修大学の伝統と未来が見えてきます。

鳥居：佐々木学長も専修大学のご出身ですが、どのような学生時代を過ごされましたか。

学長：私は商学部会計学科でしたから、周りには鳥居さんのように会計士を目指して勉強している学生がたくさんいました。私は３年から監査論のゼミに入りました。そのゼミの檜田信男先生は、学生の目から見て非常に格好良くて、それが研究者への憧れにつながりました。私の勉強の仕方は大学で大きく変わりました。高校までは一夜漬けのような勉強を繰り返していましたが、大学では一つの分野について、一冊の基本書を見つけて最初から最後まで読みつくすというスタイルに変えました。講義やゼミを通じて、勉強はそうあるべきだと思ったのです。恩師との出会いは私にとって学生時代の宝物です。

大学院では小澤康人先生の指導を受けましたが、小澤先生は私に研究者としての道を示してくださいました。また私が研究テーマとした会計史については、茂木虎雄先生の同じ授業を５年間、毎年受け続けました。履修者は５名から10名のこぢんまりと

創立150周年の2030年に向けて専修大学が確実に前進していることを実感。
田辺さん

⬆生田キャンパス

➡神田キャンパス

した授業で、就職活動で学生が減る時期には、私一人しか受けていないなんてこともありましたが(笑)。いま研究者としての自分があるのは、この3人の先生方のおかげです。

当時の自分には、研究者としてやっていけるかはわかりませんでしたが、退路を断って、やれるところまでやってみようと思った学生生活でした。これは鳥居さんにとっての難関試験であり、林さんにとっての専修リーダーシップ開発プログラムであり、田辺さんにとってのプロジェクトですね。学生時代に何か一つでもやり切った経験があると、社会に出たとき大きな自信になります。あれだけ苦しいこともやり切ったのだから、何とかなると。皆さんの話を聞いていて自分の学生時代とも重なるものがありました。

鳥居：このように歴史もあり、規模も大きい専修大学の学長と、同じマインドをもって学生生活を送れているというのは自信になります。自分も会計のことを突き詰めていければ、大成するかなと思えました。

田辺：専修大学は昨年、創立140周年を迎えましたが、これから先、専修大学はどのように変わっていくのですか。

学長：大学はその時代の若者に何を学んでほしいかを見据えて、研究活動、教育活動をしていかなければなりません。Society 5.0はご存じですか。人類は、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）というふうに進化・発展してきました。では5.0は何かというと、デジタルデータをいかに有効に活用するかを模索する時代です。そうした社会に貢献できる人材に必要なことは、デジタルデータサイエンスに関わる統計学等の分析科学になります。これらの分野の力を育てるために、学部学科を問わずこれらの授業の履修機会を設けて、社会に出た後も自らその力を高めていくことが可能となるよう計画しています。

そして、〝社会知性の開発〟を謳う大学としては、地域、産業界を巻き込みながら2030年に向けて、SDGsに取り組んでいきます。その一つとして、カーボンニュートラル、すなわちCO_2の削減のため何ができるかを大学組織として考え、踏み出していきたいと思っています。

また、学生たちはAIが前提となる社会に巣立っていくことになりますが、大学全体の基盤システムとして、AIを組み込んだスマートキャンパスづくりに踏み込んでいくことを提案していきます。

田辺：スマートキャンパスという話が出ましたが、学生や先生方のデジタルへの意識は確実に進化しているように思います。私は授業でパソコンを教えるアシスタントを務めていますが、昨年はGoogle Meetに接続するだけでもうまくできない人がいたのが、今年は学生も先生もやり方をわかっています。それと、SDGsチャレンジプログラム2020に参加したときも感じていたことですが、先生の話を聞いて、創立150周年の2030年に向けて専修大学が確実に前進していることを実感しました。

学生へのキタイ

林：目まぐるしく変化しているこのような時代に私たちは社会に出ていくことになりますが、佐々木学長が今の学生に期待することはなんですか。

学長：専修大学で学んだということがどういう意味を持つかということを皆さんには考えて社会に巣立ってほしいと思っています。そのためにも、今学んでいる専修大学はこういうところだということを、ぜひ知ってもらいたいです。

専修大学は皆さんのような若い人たちがつくった大学です。創立者の4人はいずれもアメリカに留学し、留学先で出会い、20代後半に帰国し、専修大学の前身となる専修学校を創りました。相馬永胤（そうまながたね）と駒井重格（こまいしげただ）が30歳、目賀田種太郎（めがたたねたろう）と田尻稲次郎（たじりいなじろう）が27歳の時のことです。近代日本の発展に貢献する人材を育てるための学校をつくるという目標を掲げ、留学中に相談したといいます。そして学校をつくって

からは、無給で教壇に立ちました。昼間は生業で働いて稼ぐ必要があったので、学生には夜に教えた。だから専修大学は夜間から始まったのです。そうした志を代々引き継いで、若い人たちが学び、社会で活躍してきた歴史がある学校なのだということを知っていただけると嬉しく思います。

創立者の一人、田尻稲次郎は会計検査院の院長を務めていましたが、倹約家でぼろぼろの服をまとっていたといいます。子爵でありながら、なんでそんな恰好をしているのかと尋ねられたとき、将来何が起こるかわからないから、お金は蓄えておき、いざ必要なときに使うと答えたそうです。明治41年、雑誌に専修学校（現専修大学）を含む5大法律学校の評判が掲載されましたが、そこには、この田尻先生のエピソードとともに、そういう先生に似た堅実で温厚な学生が育っているという評価がありました。

林：今の話を聞いて、若いからという理由でできないことはない。若いうちから積極的に進まなければならない、ということを思いました。田尻先生のエピソードからは、私も生田の山の上で、のびのびと育っているのかなと思いました（笑）。

学長：林さんから生田の山の話がありましたが、学生たちからは生田キャンパスまでの坂道が大変という声も聞きます。私も確かにきついなと思っていましたが、今は逆にこの地が別天地のようになることを思い描いています。生田キャンパスに配置された学部には、データサイエンスを得意とする先生方がたくさんいます。ですから今後、生田は、デジタルデータサイエンス教育・研究のメッカになると私は考えています。生田の山の上では、なんか面白いことをやっているというイメージを、「生田データサイエンスヒルズ」と名付けて、打ち出していきたい。足取り軽く、山、いや丘を登ってもらおうと（笑）。

一方、神田キャンパスは「神田神保町カルチェラタン」と称して神田神保町の文化の魅力を発信していきたい。昔、パリには様々な国から留学生が多く集まり、留学生たちはフランス語ではなく共通言語のラテン語で話していました。カルチェラタンとはラテン語地区を意味し、それがそのまま学生街を示すようになりました。森があり、カフェがあり、川が流れる。パリと同様に、そういう魅力的な学生街を神田神保町に創りたいと考えています。

景観づくりでは、首都高を地下化し、日本橋川を清流化する計画が発表されました。でもこれは残念なことに神田キャンパス近くまでは達していないので、もっと範囲を延長してほしいという運動をこれから展開していきたいです。学生街らしい景観をつくり、神田キャンパスの近くを流れる日本橋川が憩いの場となるように。「生田データサイエンスヒルズ」と「神田神保町カルチェラタン」というキャッチコピーで、専修大学らしいオリジナリティを打ち出していきたいと思います。

話は尽きませんが、ここで時間になりました。佐々木学長、今日のご感想は？

皆さんとお話しできてすごく安心しました。2年生からは、私たちの1年次の時間をどうしてくれるんだと言われるかと心配もしていました。実際は、そういう思いもあったのかもしれませんが、それでも何とか自分なりに乗り越えようとする姿を知り、頼もしく感じています。